

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2005年度研究成果報告書

研究科名	立教大学 大学院			文学 研究科		日本文学 専攻	
指導教員	所属・職名			氏 名			
	文学部・教授			渡辺 憲司 印			
自然・人文の別	自然 ・ 人文			個人・共同の別	個人 ・ 共同 名		
研究課題名	江戸川乱歩近世コレクションとその周辺 乱歩の交友関係を中心に						
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年			氏 名			
	文学 研究科・ 日本文学 専攻・後期課程 4年			丹羽 みさと 印			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年			氏 名			
	文学 研究科・ 日本文学 専攻・後期課程 4年			丹羽 みさと			
研究期間	2005 年度						
研究経費	200 千円						

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では江戸川乱歩旧蔵、近世資料をもとに収集の背景を、個人的な点から調査していった。中でも乱歩が幼少時代を過ごし、敬愛する小酒井不木が住んでいた名古屋は数度足を運び、実地調査を行ったことは、『探偵小説四十年』など随筆の信憑性の高さを知る上で貴重な体験となった。

また蔵書印をもとに、資料自体の来歴や乱歩以前の旧蔵者達についても調査を行った。特に『隅田川兩岸一覽』にある林忠正の蔵書印については、林忠正シンポジウムやNYメトロポリタン美術館調査などに参加し、様々な意見をうかがうことが出来た。

今回の研究は乱歩研究のみならず、近代の近世資料の受容という、より大きな研究の基礎として位置付けられる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 江戸川乱歩 } { 近世コレクション } { 購入背景 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究の成果としては、まず6月に行われた日本近世文学会春季大会の発表を挙げたいと思う。本大会では乱歩の個人的な経験から近世資料収集の契機を考察していった。一見、探偵小説家と近世資料というのは意外な組み合わせであるように見える

乱歩の土蔵(書庫)の中には、乱歩のペンネームの元となったエドガー・アラン・ポーをはじめとする海外の推理作家のペーパーバック等が多数揃えられており、乱歩も自身の随筆で海外の推理小説家について語ることは多い。しかし、近世資料の中にも『鎌倉比事』(享保3年刊)や『大岡忠相比事』(写年不明)など、裁判ものといわれる比較的探偵小説に近い分野が存在する。またトリックに使えるものといえば、『仙術一興鑑』(明和5年刊)など、座敷芸に近いが、日本古来の手品の方法を記した資料なども存在する。乱歩の蔵書がこれらのみであれば、探偵小説家という職業の延長上にその収集が位置づけられるが、他にも『若衆物語』(刊年不明)などの男色物や『東海道名所図会』(寛政9年刊)などの地誌、『好色一代男』(天和2年刊)などの西鶴物や『傾城歌三味線』(享保17年刊)などの八文字屋本などもコレクションに見える。これらを職業の点のみから考えることは困難である。

そこで、乱歩の個人的な環境から収集の背景を考えてみると様々な人物が影響を与えていたことがわかった。少年時代には祖母から『大和名所図会』を読んでもらい、乱歩の才能を最も早く見出した小酒井不木からは、その随筆によって探偵小説と近世資料がつながることを知った。また不木の死後には岩田準一と男色関係の猟書を始め、近世資料を読む楽しみを覚えた。このような周辺の人々によって、乱歩の近世資料への関心が育まれたと言っても過言ではない。そして、その関心が蔵書となって実を結ぶのは、敗戦後の財閥解体等、GHQによる社会的、経済的な処置が貴重書の市場放出へとつながり、乱歩が幸運にもそれらを吸収できる状況にあったためである。

戦後貴重書が放出されたことは、古書肆弘文荘の著書などにも記されているが、資料に捺されている蔵書印が大きな手がかりとなった。もちろん時代にかかわらず、蔵書印は以前の所有者を知る上で最も確実な方法である。

そこで、乱歩コレクションの来歴およびその価値をより明確にするため、大会と同時開催の江戸川乱歩旧蔵江戸文学作品展で出版した図録には、展示資料約90作品に捺された蔵書印を翻字、掲載した。(印字不明な蔵書印は拡大画像を巻末に掲げ、会期中多くのご意見を頂いた。)

本図録の巻頭には『蔵書印と蔵書印主 江戸川乱歩コレクションから』として小論を掲載したが、その中で調査を続けたものがいくつかあった。ひとつは「江戸四日市古今珍書 = (にんべん+會) 達摩屋五一」という蔵書印である。本印の所有者、岩本五一は文化14年築地に生まれ、12歳で日本橋十軒店の書舗西村宗七方へ奉公した後、書物の仲買、露天商などを転々とした人物である。五一の交友関係は広く、幕末・明治の戯作者、仮名垣魯文や考証随筆を記した山崎美成、芥子屋の石塚豊芥子、内神田雉子町の町名主斎藤月岑、柳亭種彦の弟子、笠亭仙果などと交流があった。国書刊行会によって活字化されている『燕石十種』や『新燕石十種』『続燕石十種』は、養子の活東子とともに自家保有の資料を編纂したものである。シリーズの内容からも、五一がかなりの蔵書家であったことが分かるが、現在のように目録等は出版されていないため、その全体像は杳として知れない。

しかし、五一の蔵書印に注意をして資料を見ていくと、先のシリーズには取り上げられていないものの、西鶴作品によく捺されていることがわかる。乱歩コレクションの中では『好色一代女』(貞享3年刊)、『万の文反古』(正徳2年刊)、『西鶴置土産』(元禄6年刊)、『男色義理物語』(元禄12年刊)などに捺されている。また夏に参加したニューヨーク市立図書館スペンサー・コレクションの調査でも『好色一代女』(同年刊)に本印を見ることができた。さらに国立国会図書館には『好色二代男』(貞享元年刊)に同印が、『好色一代男』(天和2年刊 巻2は全丁写)には五一の別印である「法斎悟一徧書翁」を見ることができた。今後、さらなる調査が必要であるが、五一がどれほど西鶴作品を所有していたのか把握することは、明治期に西鶴を「再発見」した淡島寒月以前、幕末において西鶴がどのような認知をされまたどのくらい需要があったのか量るのに適当な指針となるように思う。

研究成果の概要 つづき

また乱歩コレクションに納められている葛飾北斎画『隅田川兩岸一覽』には海外に浮世絵を紹介した先駆者、林忠正の印「林忠正所蔵印」が捺されている。林忠正（旧姓、長崎志芸二）は1900年頃パリを拠点として、浮世絵の普及に努めた美術商であり、特にエドモン・ド・ゴンクール著『北斎』の執筆に尽力したことは有名である。その林の蔵書印が北斎の『隅田川兩岸一覽』に押されていることは大変興味深い。本印に関しては「*存疑」（渡辺守邦、後藤憲二編『新編蔵書印譜』青裳堂書店 2001年）、「擬印か」（中野三敏編『近代蔵書印譜』第三編 青裳堂書店 1984年）などと注が付けられている。

図録が刊行された6月の時点ではそれ以上のことはわからなかったが、その後ニューヨークメトロポリタン美術館での調査（8月）や林忠正シンポジウム（11月）の参加、東京国立博物館での「北斎」展（11～12月）での印記の確認などを行ったところ、本印は林作成の「図案集」や、浮世絵にも捺されており、林が使用していた可能性が高いことがわかった。

また『隅田川兩岸一覽』の調査も行った。林の死後、昭和4年に売却されたコレクションの中に『隅田川兩岸一覽』の名前が見えるが、売却先は不明であり、また林の識語がある『隅田川兩岸一覽』が別に存在することから、売却されたコレクションのものが乱歩旧蔵本を指すとは限らないようである。

このように「林忠正所蔵印」に関しては、いくつか未解決の問題が残るが、より多くの「所蔵印」が捺してある資料（諸外国にも散見するという意見を林忠正シンポジウムで得た）や、自分の印がいくつか捺してあるという林の日記を見ていき、今後も引き続き調査していく必要がある。

乱歩コレクションに捺された蔵書印の調査は、乱歩の掌中に収まるまでの経緯を確認するものである。これは旧蔵者たちの好みや収集状況を把握することが出来るだけでなく、その古書の価値や利用方法なども明確にすることが出来る確実な方法の一つである。今後も引き続き蔵書印の調査を続けるとともにその周辺の状況などを探り、時代の中でその資料が果たしてきた役割などを研究していきたい。

最後に、乱歩の才能を見出し、伸ばし続けていった小酒井不木の近世資料に関する調査に関してであるが、旧蔵書が収められている名古屋蓬左文庫に行ったものの、不木の書簡や創作ノートなど直筆資料は未だ整理中ということで、閲覧が出来なかった。『棠陰比事』など、不木が随筆で言及しており、且つ乱歩の随筆にも見える資料をいくつか閲覧したが、書き込みではなく目立った発見はなかった。また蔵書印も見あたらなかったため、蓬左文庫に納められているもの以外の旧蔵書について確認することは難しいことがわかった。直筆資料を調査しないことには不木の近世資料に関する見識について研究することは難しく、不木と近世資料に関してはもう少し時間が必要である。